

からこかき

第30号 令和2年10月8日(木)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 080-7029-1655 Email: kksien_2004@yahoo.co.jp

遺物紹介環濠(パネル)

1 はじめに

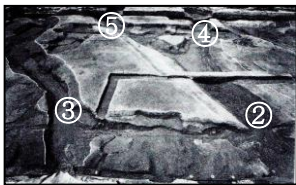
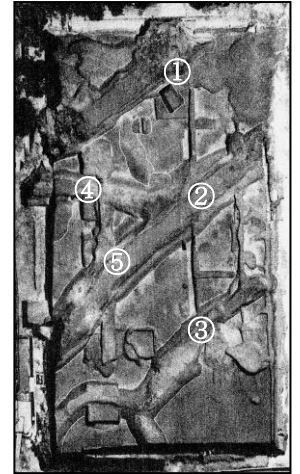
今回は、常設展展示図録「1. 遺跡調査のあゆみ」に掲載されている環濠関連の2点の写真(9頁)を紹介します。

1点は、第40次調査(1990年小学校体育館改築に伴う)の「環濠に打ち込まれた橋脚」で、1点は第79次調査(1991年範囲確認調査に伴う。調査次は改装前図録に従う。)の「大環濠」です。前者は、遺跡の南地区で検出され、後者は西地区で検出された遺構です。遺跡公園入口の案内パネルに掲示されています。今回は、図録を通して、唐古・鍵遺跡の「環濠」の一場面を紹介します。

2 橋脚パネル～第40次調査

(1) 調査区～上・下層の遺構面

調査区(760㎡ 南北36m東西2m)からは、二つの遺構面が検出され、下層面は弥生前期～中期前葉、上層面は弥生後期～古墳期初頭の遺構が確認されています。下層遺構面は、前期は木器貯蔵穴1基のみですが、中期前葉になると3条の大溝(右調査地全景写真 東から:インターネット画像より。以下同じ。)が北から順にSD-104①・102B②・103B③が検出されています。その後、中期中葉(気候安定期)の溝は、遺構面が確認されていないので継続したか否



かは不明です。3条は、中期末の洪水による溝の埋没痕跡に違いがあり、掘削の時間差が確認できます。北よりの①の溝(幅6m深さ2m)は埋没し、南に6m離れた中央の溝②(幅5.5m)は埋没後に再掘削され、南端の溝③(幅3～4m)は埋没痕跡はありません。後期は、溝の規模が時間経過とともに縮小しているのが分かります。

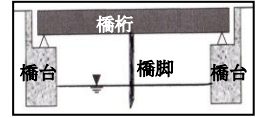
上層遺構面から検出された後期初頭の前述した2条の先行の溝②と後行の溝③が中期と同じ位置に掘削され、その後②の溝は分岐してSD-101④とSD-102⑤に分流(左写真:分岐溝)して、隣接する第47次調査の溝に連なっています。橋脚は、分岐した⑤の溝中央から検出されています。なお、④の溝(後期初頭～古墳前期)からは、送风管(3点)と奈良県では出土例が少ない板状鉄斧(1点)が出土しています。

(2) 橋脚～複数の入り口

検出された後期段階の橋脚の基礎部分ですが、報告書では溝や橋脚の規模など詳細は明らかになっていませんが、南地区の西方で検出されている集落域に続く入り口の橋であったと推定できます。かつては、集落の防御性を重視し環濠集落は入り口が1箇所とする見解がありましたが、滋賀県下之郷遺跡など各地の環濠集落遺跡からは複数の入り口が報告されています。唐古・鍵遺跡でも、北小学校プール改築工事に伴う第47次調査でも中期前葉と後期初頭の2箇所橋脚が検出されています。また、唐古池の南側堤防整備に伴う第51次調査では中期の南北方向の溝(幅5m・深90cm)から7本の木杭が検出されその延長の小穴を含め橋脚遺構と報告されています。なお、第51次調査に次いで調査され近接する位置にある第53次調査区(緩傾斜の地形)の中央部分からは、径10cm(中期)ほどの杭が南北方向に列状に打ち込まれていたとのこと。当時の調査担当者は水田施設の可能性を指摘(「唐古・鍵遺跡I範囲確認調査」932頁)していて、「しがらみ」(制水機能)とも考えられその関連も注目されます。

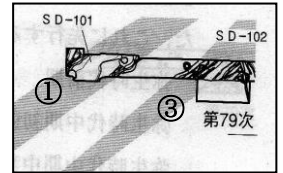
(3) 最古の橋脚～川西根成柿遺跡の桁橋

なお、奈良盆地で最古（前期古段階～中段階）の環濠集落と考えられる橿原市と大和高田市の市境にある「川西根成柿遺跡」の集落の南端の大溝（幅3～4m深さ90cm）から2本の杭と4基のピットが検出されています（右下写真）。径10cmの杭は、それぞれ残存長21.4cm・27.5cm、溝底からの深さは28.1cm・16.4cmで東西に1m間隔で検出されています。杭は主桁・床板を支える橋脚と想定されています。一方、ピットは楕円形で長径50cm短径30cm深さ30cm程度で、橋の両端にあって橋を支える橋台と考えられています。報告書では、路面の長さは3.5～4m、幅1.5～2mの桁橋（橋の重さを桁で受け橋台・橋脚で支える橋：右上は桁橋イメージ図）と復元されています。縄文時代の橋は、発見された遺構は木道のみで出土例はないのですが、倒木などを利用した丸木橋だったと推測されています。川西根成柿遺跡の橋は、弥生前期中葉です国内最古級の桁橋です。パネル標示の弥生後期の橋脚は、川西根成柿遺跡で明らかになった「桁橋」の流れをくむものと思われる。



3 環濠パネル～第79次調査

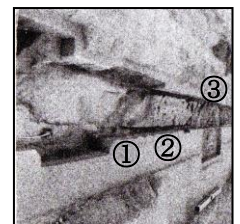
第79次調査地は、遺跡公園開設前の西口駐車場の脇に溝があった場所で、唐古池西側の土手付近から国道24号線付近まで東西80m・幅3mの細長い調査区です。そこからは、環濠の変遷から西地区の集落域の盛衰を確認できます。遺構検出面は、中期中葉から中世までの一面（厚さ20cm）のみです。その中で、標示パネルの環濠は、中期中葉の環濠（SD-101）①で、図録は、大環濠としています。



(1) 中期前葉の環濠（SD-102）～先行環濠

実は、標示パネルのSD-101の下の地層から時間を遡る中期前葉の環濠SD-102③が検出されています。幅3.6m深さ1.4mと小規模ですが、南西方向の第19次調査地に連なる初現の先行環濠です。地形は、調査区東側と西側まで70cmと高低差があり、また、調査区北と南側は微高地です。従って、中期前葉の環濠は、地形からみて西地区の居住域の北側を画す中規模の大溝で集落の排水機能を担ったと思われる。付近から散乱した人骨頭頂部片が出土し、この時期は住居と墓が近接した縄文時代の墓制が継続していたことが分かります。

（右上：中期前葉のSD-102③・中期中葉のSD-101①の環濠配置図）



(2) 中期中葉の環濠（SD-101）～集落のインフラ

さて、標示されている環濠①ですが、幅8m以上深さ1.2mの規模で前葉の環濠③に比べ大規模化しています。中期中葉のSD-101①が掘削された後に前葉のSD-102③は埋没しますが、その間隔が東西13mほどあります。注目したいのは、その範囲内に井戸や炭灰土坑や柱穴が多数検出され濃密な居住域②であったと考えられています。竪穴住居の耐用年数は10年程度といわれていますので、数度の立替があったと思われ、最低でも9棟以上の竪穴住居が想定されています。従って、SD-101①は、中期前葉から中葉にかけての居住域の北方向への拡大に伴って築造されたものと推定されます。一方、周辺から小溝が多く検出されています。そこからは、集落域を画す排水機能を持った大溝とそこに雨水や生活排水を注ぎ込み小溝といった低地部集落の仕組み（インフラ）が確認できます。標示パネルは、排水機能を担った西地区の区画溝といえます。（右上図：左手前①が西側の中期中葉の溝SD-101。中央が②の住居址群。右手③の中期前葉の溝SD-102。）

(3) 後期の環濠～集落の衰退

その後中期後葉まで、SD-101C（幅6.8m深1.2m）、SD-101B（幅4.3m深0.8～1.2m）と再掘削され、居住域を支える排水機能は継続していますが溝の規模は次第に縮小していきます。後期初頭になると、溝SD-101のみとなり、幅3.2m深0.4～0.5mと大幅に縮小していますので、排水を集約する溝の機能は維持できなかったと思われる。そして、後期前葉は数基の井戸、弥生終末期は土坑2基のみの検出となり集落の衰退を裏付けています。

用語説明(2) 年縞 ～ 7万年の気候変動がわかる

1 年縞堆積物～タイムカプセル

年縞堆積物(略して「年縞」安田喜憲氏が命名)は、年輪年代法と類似しています。年輪年代法は、樹木が毎年気候変化に伴い年輪幅が変化するので、その年輪型を利用して暦年代を特定します。年縞は、湖底などに木の年輪のように泥が季節ごとに連続して堆積した地層で、堆積後は二次的な錯乱を受けない条件下では正確に累積します。そのような湖底には、左写真図のような白黒のバーコード状の一年単位の縞模様が形成されています。具体的には、春から夏にかけては、プランクトンの死骸や珪藻が繁殖して堆積するため白色の層ができ、秋から冬には粘土鉱物が堆積するので黒色の層が堆積します。世界的には発見例は少ないのですが、国内では水月湖(福井県)・東郷池(鳥取県)・目潟(秋田県)・深見池(長野県)などで確認されています。特に、水月湖の湖底には、世界一長い45mもの年縞があり、7万年分(1年が平均0.7mmの薄さ)に相当するとのことで、「奇跡の湖」と呼ばれています。最深部は15万年前の堆積物があると考えられています。



考古学の分野で関心をもたれる理由は、年縞には花粉やプランクトンなどの化石や火山灰・黄砂など環境が分かる物質が多くかつ規則正しく含まれているため、過去の植生・気温・水温などの古環境や洪水・地震・津波・火山活動などの自然環境の復元が可能となるデータを得ることができるからです。注目されているのは、古環境は一定の周期性が認められ、スーパーコンピューターを使って将来の地震の発生や気候変化が予測される点です。

なお、水月湖の2006年の調査データは放射性炭素年代測定法(^{14}C 測定法)の較正に使用され、5万年前の誤差が150年と高精度の世界最高水準の年代モデルとされる「IntCal13」(世界標準の較正曲線)が作成されています。

2 水月湖～奇跡の湖

福井県若狭市の水月湖の年縞は、「縄文のタイムカプセル」と呼ばれる「鳥浜貝塚」の調査の一環として行われたボーリングで偶然発見されました。水月湖は、県南西部の若狭町にあり、日本海沿岸に位置し国定公園の三方五湖の一つです。三方五湖の中で面積は最大で4.16k m^2 ・水深34mの汽水湖です。年縞の形成には、周囲の地形が影響しています。水月湖に流れ込むのは小川のみで、湖底は自然沈降しさらに周囲の山々が風をさえぎり湖水をかき混ぜていません。湖底の深部には硫化水素が湧出するため酸素がなく生物も生存していませんので、1年単位の環境変動が確実に記憶されます。古環境は、北極やグリーンランドの氷床のコア(氷層)に閉じこまれている大気を分析し過去の海面気温などが復元されていますが、堆積速度の遅い海洋は数百年単位の縞ですので年単位の変動を表してはいません。類似するものに、尾瀬国立公園内にある尾瀬ヶ原湿原の泥炭層に堆積したハイマツ花粉の多寡に着目した花粉分析がなされています。湿原の泥炭層が殆ど水を通さない条件下ですので7600年間の年単位の気温変化が復元されています。(「日本の先史・歴史時代の気候」坂口豊「自然」1884年5月号)

なお、若狭町鳥浜の縄文パーク内には、「若狭三方縄文博物館」と国内初の年縞堆積物専門の「福井県年縞博物館」(平成30年開館)があります。

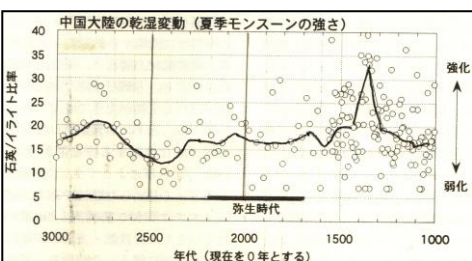
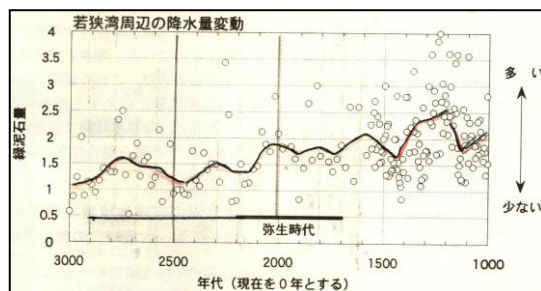
3 解析～古環境復元

水月湖の学術調査は、1991年の試掘を経て1993・2006年・2012年の3度実施されています。1993年の調査では、過去17000年間の古環境が復元されています。(季刊考古学第56号「稲作の拡大と気候変動」福沢仁之1996年)同論文では、縄文晩期～古墳時代(3100～1000年前)の①雨量②寒暖③海水準などの気候変動を次の通り復元しています。

① 雨量の増減(緑泥石に着目) 三方五湖周辺の地質は、粘土鉱物のほとんどが緑泥石(黒雲母に似た組成を持つ層状の鉱物)です。従って、年縞堆積物に含まれる緑泥石の増減は付近の小河川(現 鱒川)からの雨量の流入

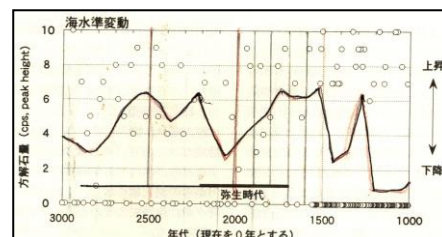
量を表しています。右図の緑泥石量のグラフ（一部加筆 以下同じ）からは、弥生前期中葉をピークにその前後は降水量は減少傾向を、中期後半から古墳期は増加傾向を示しています。

② 寒暖変動（イラスト・石英に着目） 夏季の南東モンスーンは、湿潤で高温な条件をもたらす。冬季の北西モンスーンは寒冷で乾燥した気候条件をもたらします。モンスーン活動は、大陸からの風成塵にあらわれ、温暖期は、モンスーン活動が活発な時期で黄土地帯は湿潤化して黄砂の供給量は減少します。一方、寒冷期は不活発な時期で黄



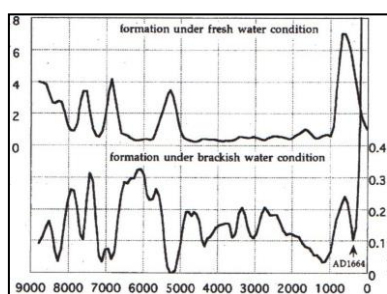
砂の供給量は増加します。黄土現象がみられる際に増加する鉱物は、重量濃度の高いイラスト(雲母粘土鉱物)や石英などです。従って、年縞堆積物中のそれらの鉱物の増減は、当時の乾湿や寒暖の変動を示しています。左図は、弥生中期前後はモンスーン活動の活発な時期で温暖化のトレンドを示し、中期後半から古墳期にかけては冷涼化の傾向を示しています。なお、①図の若狭湾周辺の降水量は②図の夏季モンスーン活動の変動曲線と同様の傾向を示していて、夏季モンスーン活動が日本列島に降水をもたらしていることが分かります。

③ 海水面変動（鉄鉱物に着目） AD1664年以前は地元の気山付近から海水が流入していたとのことで、海水が流入し汽水化すると黄鉄鉱や方解石（硫化鉄鉱物）が生成されます。また、海水が流入しない淡水化の時期は菱鉄鉱（炭酸鉄鉱物）が生成するとのことです。従って、年縞堆積物の黄鉄鉱・方解石や菱鉄鉱の増減は、海水面の変動を示しています。右図からは、弥生前期と弥生後期から古墳期初頭は海水面が低下していたことが分かります。因みに、海水面上昇の時期は一般的に温暖化の傾向を示し、低下の時期は冷涼化（寒冷期）の期間を表すと言われています。

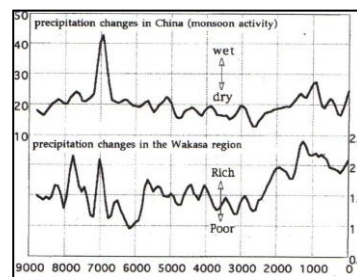


4 8800年間の水月湖の年縞データ～文化の変容と気候変動

1991年（試掘調査）に水月湖から採取された柱状コアからは、過去8800年間の年縞堆積物が検出され、海面変動・降水量・風成塵（代表鉱物がイラスト）が確認されています。左図は、年縞堆積物中の方解石・菱鉄鉱の変動図で上のグラフは菱鉄鉱の増減で、下のグラフは方解石の増減を表しています。海水面変動は、鬼界アカホヤ火山灰堆積（7325年）以降に海水面は上昇し、現在から7000～6800年前、5500～5000年前、4400年前、3500年前、3000年前、1800年前の6時期には海水面は低下（冷涼化）し、概ね500年周期で上昇・下降を繰り返しています。これは、縄文海進時の海退や縄文中期の海



退そして縄文後・晩期の海退そして弥生の小海退・古墳期の小海退と呼称される海面低下を裏付けています。因みに、縄文前期（約7200年前～）・中期（約5500年前～）後期（約4700年前～）・晩期（3000年前～）といった縄文時代の時代区分（画期）と概ね符号しています。このことは、年縞堆積物がもたらす気候変動のデータと縄文期や弥生期の文化変容期とは一定の相関関係をもっていることを示しています。なお、右図は、粘土鉱物の増減（イラスト・緑泥石）を基に、気候の寒冷・温暖変動と降水量の変動を表しています。上グラフが乾湿変動、下グラフが降水変動です。



（4は、「天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物」「第四紀研究」1998年福沢仁之著より）

雑学(2) 弥生土器のはじまり

1 弥生式土器の発見

時代名称の「弥生」は、弥生土器に由来しています。弥生(式)土器は、1884年(明治17年)に有坂鋁蔵氏(同行者:坪井正五郎・白井光太郎氏)が東京大学の裏門を出てまもなくの崖際にある貝塚から顔を出している土器(右写真)を発見したことから始まります。場所は、東に上野の不忍池を見下ろす小高い丘の上(標高20m程度)です。当時の東京府本郷区向ヶ岡弥生町「向ヶ岡貝塚」からの出土です。なお、その前年にも有坂氏は上野の現国立博物館裏手の鶯谷駅南口の新坂貝塚(向ヶ岡貝塚とは根津の谷を挟んだ対岸に位置)からも同類の土器を発見しています。なお、周辺からは、その時期の活動痕跡を持つ遺跡が幾つか確認されています。向ヶ岡貝塚から発見された土器は、観察記述によると、「現高22.0cm 胴部径22.7cmのやや扁平な胴部で頸部は欠けているが平底の壺。器形はイチジクの実の形をし肩の付近には縄目で装飾しその上部に円形の貼付文がある。胴部は、丁寧にミガキ調整がなされ薄くて焼きムラもない赤褐色の土器」とあります。縄文土器は弥生土器と比べやや低温の酸化焼成の野焼きですので赤褐色となります。出土土器は、縄目の文様や焼成技術などに縄文土器の名残を残している土器といえます。



土器の名称は、在野の研究者蒔田鎗次郎氏が現在の駒込駅東口付近(駒込一丁目遺跡)の自邸のゴミ捨て場の竪穴から出土した類似の土器を「弥生式土器」と命名し、明治29年(1896年)に「東京人類学雑誌」で報告したことに由来します。留意したいのは、向ヶ岡貝塚の出土土器は、南関東の土器編年では「前野原式土器」で、前野原式は畿内の庄内式併行期の土器とされていますので弥生終末期の土器です。さらに、縄文施文に着目し駿河湾東部に広まる弥生後期土器に類似しているとの指摘があります。

2 石器時代の弥生土器

1836年にデンマークの王立博物館に勤務していたトムゼンは、道具(原材料)に着目した展示品の分類法を考案し、今日でもこの時代区分法(石器時代・青銅器時代・鉄器時代)が継承されています。蒔田鎗次郎氏は向ヶ岡貝塚周辺の遺跡からも弥生式土器が出土し、それには石器を伴うと考古学雑誌の中で報告し、弥生式土器が石器時代の土器であることを明らかにしました。その後、名古屋市熱田高蔵遺跡をはじめ大阪市国府遺跡、兵庫県加茂遺跡・福岡県今津遺跡などで相次ぎ弥生式土器と共伴した石器が出土し、それらが縄文時代の石器と異なることに関心が集まりました。そして、明治の終わりごろになると、出土した石包丁や蛤刃・柱状・扁平片刃石斧や石剣・磨製石鏃などが朝鮮半島や中国東北部でも多くみられることから、弥生式土器の使用者が大陸からの移住者と考えられるようになりました。この見解は、戦後も継続され今日でも有力な学説となっています。

3 遠賀川式土器

1923年(大正12年)には福岡県八女市岩崎遺跡から大量の焼米(炭化米)が出土し、さらに2年後には宮城県柞形田遺跡からは稲籾の圧痕土器(現在は中期土器と編年)の出土が報告され、大正時代には既に弥生式土器と稲作との関わりが想定されていました。



昭和に入ると、1931年(昭和6年)に、福岡県の筑豊地帯を経て響灘に流れ込む遠賀川右岸の河川敷(水巻町立屋敷遺跡)から多量の弥生式土器(右写真:立屋敷遺跡出土土器)が発見され、考古学会に衝撃が走りました。発見者は、在地の郷土史家名和羊二郎氏で、それまでは無文とされていた弥生土器(中期の須玖式:1類土器)と異なるヘラ描き羽状文などの多様な文様をもつ有文土器(前期:2類土器)でした。その翌年には、兵庫県明石市吉田遺跡や大阪府高槻市安満遺跡から出土したヘラ描き文様の土器(安満B類土器)が立屋敷遺跡の2類土器と共通するとし、小林行雄氏は「考古学」(「安満B類土器考」など)に発表し、「遠賀川式土器」と命名しました。

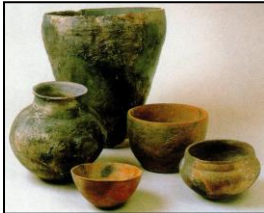
2年後の1934年（昭和9年）になると、名古屋市西志賀貝塚から出土した遠賀川式土器が報告され、齊一的な特徴を持つ遠賀川式土器が東海を東限として広範囲に分布していることが分かりました。今日でも、遠賀川式土器は、水田稲作が伝来した北部九州から東海・東北・関東地方へと至る稲作（弥生文化）伝播の指標となっています。

4 弥生土器

向ヶ岡貝塚から出土した土器は、縄文土器の一種とされていたので「弥生式土器」（「貝塚土器ニ似テ薄手ノモノ」）と呼ばれていました。しかし、1936・37年（昭和11・12年）の唐古遺跡をはじめ各地の発掘調査により弥生式土器の時代が狩猟採集を生業とする縄文時代と異なった文化であるとし、弥生式土器が農耕社会を支える「農民の土器」という認識が広まりました。そして、昭和50年代になると、稲作の伝来を裏付ける水田遺構が菜畑遺跡や板付遺跡の下層から検出され、かつては縄文時代晩期の土器とされていた北部九州の突帯文土器（山ノ寺式土器・夜臼式土器）が同じ地層から出土しました。佐原真氏は、土器で時代を区分するのではなく時代を特徴付ける指標で区分するべきとし、前号（からこかぎ29号）で少し触れましたイギリスの考古学者チャイルドの「新石器時代」の概念を採用し、「食料生産を基礎とする生活が開始された時代が弥生時代であり、その文化を弥生文化、用いた土器を弥生土器」（「農業の開始と階級社会の形成」岩波講座1）と定義しました。今日では、「弥生土器」という名称が定着しています。従って、「稲作文化の土器を弥生土器」とすると、北部九州の山の寺式や夜臼式土器といった突帯文土器が弥生（早期）土器となります。（「弥生文化の研究」3佐原真1986年）今日、最古の弥生土器とされるのは、福岡市橋本一丁目遺跡の波状口縁の方形浅鉢（右写真）です。口縁部外面から採取された炭化物の炭素年代の測定値は、 $2765 \pm 40^{14} \text{CBP}$ （前10世紀中頃）と報告されています。外見すると明らかに縄文土器です。

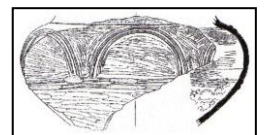
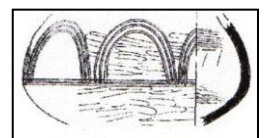


5 弥生早期土器



弥生土器の由来について、縄文晩期の壺形土器に求める見解と朝鮮半島の無文土器時代前期の刻目突帯文土器の壺に求める見解が古くから提示されていました。これは、板付Ⅰ式の前期土器の成立をめぐる論議でしたが、突帯文単独期の早期土器であっても同様です。縄文晩期の土器に祖形を求める見解は、東北地方の亀ヶ岡式土器に壺の比重が高まり、それが弥生土器と器形や文様が類似していることに着目しています。近年は、亀ヶ岡式土器（大洞A式期）の

文様を持つ特徴的な土器が北部九州や西日本各地で発見され注目されています。（「板付遺跡Ⅰ式土器成立における亀ヶ岡系土器の関与」設楽博巳・小林青樹2007年）。特に、沈線重弧文土器（右図下）は、遠賀川式土器に見られる文様ですが、東北地方に見られる隆線重弧文土器（右図上）の影響のもとに成立したとする見解が注目を集めています。いずれの土器は福岡市雀居遺跡から出土しています。一方、朝鮮半島に祖形を求める見解（多数説）ですが、半島の刻目突帯文土器は、口縁部直下の胴部上部に突帯を貼付する特徴を有する土器で、夜臼式土器と形態が類似しています。また長崎県島原市山ノ寺遺跡に標識を持つ山ノ寺式土器（左図：菜畑遺跡出土の山ノ寺式土器）は、幅広い粘土板（紐でなく帯）による輪積みや粘土の接合が外傾接合など縄文土器とは

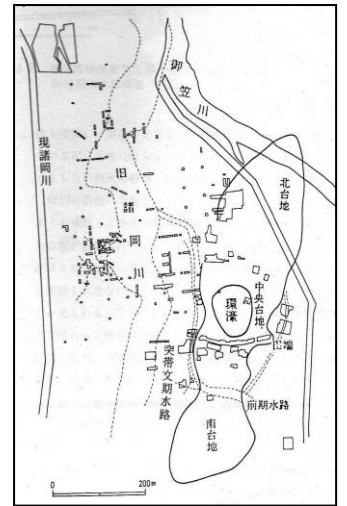


異なった特徴を持っています。従来、半島由来説の反対論の根拠となったのは、畠作農耕を基軸とする半島との生業の違いや年代間の不整合でした。近年、韓国南部の突帯文土器が出土する遺跡の木炭や炭化米からは、1300～1000calBCとの年代値が報告され、弥生早期の山の寺式土器の930calBCとする歴史民族博物館の年代観に近づいています。また、菜畑遺跡や筋違遺跡など弥生早期・前期の遺跡から畠作を裏付ける報告事例が多くなってきています。いずれにしても、弥生文化の成立について、縄文文化の自立的発展を強調する意見と半島からの移住者集団の関わりを強調する意見とに分かれている中で、弥生早期土器の評価が注目されます。

遺跡紹介 板付遺跡～弥生文化の標識遺跡

1 位置

(1) **地形** 板付遺跡は、稲作伝来期の人々の生活や文化を確認できる国内最古級の弥生遺跡です。遺跡は、板付空港（現福岡国際空港 雀居遺跡所在）から西南1kmにあり、周辺には、比恵・那珂遺跡群、須玖岡本遺跡をはじめ著名な遺跡が数多くあります。遺跡は、標高12mの独立丘陵化した**中位段丘上**にあり、周囲には旧御笠川の氾濫によって形成された標高7m弱の沖積低地（氾濫原）が広がっています。遺跡は、南北に並んだ三つの台地上にあり、中央台地に環濠集落が、北台地には墓域があり、南台地からは弥生中期から古墳期の集落遺構が確認されています（右図：周辺図）。また、東側の低地部からは水田域が検出されています。



(2) **標識遺跡** 遺跡では、稲作の開始や環濠集落の形成さらに首長層の誕生そして半島系の土器・農耕具・磨製石器・紡錘車など「弥生時代」を構成した遺構・遺物が確認できます。以下、学史的評価の高い発掘成果に着目し、遺構を中心にその評価を含め報告します。

2 弥生土器と金属器

遺跡のあけぼの 大正5年に板付田端の村人が中央台地南東部付近の盛土（墳丘）を切り崩していた時に、地下1.25mあたりから甕棺墓群（6基：集団墓と思われます。）があらわれました。そのうち3基から副葬された細形銅剣・細形銅矛各3本が見つかり、翌年の「考古学雑誌」に報告（中山平次郎博士）されました。北部九州の甕棺の型式分類では、前期の伯玄式甕棺に続く中期初頭（板付Ⅱ式期）の「**金海式甕棺**」と考えられています。この発見により、弥生式土器が、「**金石併用期**」の土器であることがわかりました。

3 最古の弥生土器と環濠集落

(1) **最古の環濠集落** 昭和25年には、在野の研究者（中原志外顕氏）が、縄文晩期の土器（夜臼式土器）とともに弥生前期の板付式土器（左写真：右が夜臼式土器・左が板付式土器）をゴボウ畑で発見しました。当時は、既に突帯文土器が最後の縄文土器とされていたので共伴した板付式土器が最古の弥生土器と考えられました。また、遺跡が**最古の弥生遺跡**との期待が高まりました。そこで、その翌年から4年間にわたり日本考古学協会の発掘調査がおこなわれました。調査によって、中央台地に沿ってV字断面の**環濠**や複数の貯蔵穴・井戸が検出され、さらに環濠からは炭化米や石包丁などの大陸系磨製石器が出土し、遺跡は稲作農耕を営む最古（当時）の**弥生前期前葉の環濠集落**であることが確認されました。



(2) **初期環濠** 環濠（右：当時の写真）は、中央台地の頂部を囲み南北径100m・東西径81mの卵形で、溝幅2m以上・深さ1m以上（傾斜40度）と推定され、弥生初期の環濠集落（径100m程度の卵型）と共通する規模です。環濠内では、住居址は検出されてなく貯蔵穴のみです。環濠が多重であったか否か、また土塁の有無など慎重な意見があります。環濠は、メンテナンスをなされず掘削以降から埋没をはじめたと予測されています。この時期の集落の構成員は、住居址や遺物の出土量も少ないことから限られた人数であったと考えられています。



環濠が多重であったか否か、また土塁の有無など慎重な意見があります。環濠は、メンテナンスをなされず掘削以降から埋没をはじめたと予測されています。この時期の集落の構成員は、住居址や遺物の出土量も少ないことから限られた人数であったと考えられています。

(2) **環濠機能の変化** 板付遺跡では、後述の通り環濠形成よりも稲作伝来の時期が先行していたことが分かり、当時は、稲作の生産力の高まりにより防御性を重視した環濠集落を生み出したとする



見解が支配的となりました。その後、那珂遺跡（右：写真）や江辻遺跡からは稲作伝来期（突帯文土器単独期）の環濠が発見されています。韓国の環濠は、蔚山市検丹里遺跡（左写真）をはじめ蔚山市芳基里、晋陽市大坪玉房遺跡など半島南

東部の丘陵上に集中しています。立地条件や環濠内の住居の検出など異なっていますが、その形態（楕円形）、規模（100m）やV字断面など国内の前期の環濠集落と共通項があり、半島に源流があったと思われます。但し、菜畑遺跡や曲り田遺跡は環濠は掘削されてなく、早期から前期初頭の環濠や集落構造も明確なものは少なく、この時期の国内の環濠集落は皆無か少数であったとする意見もあります。（「弥生社会における環濠集落の成立と展開」藤原哲 総研大文化科学研究 7号 2011年）

弥生中期以降になると西日本にも数多くの環濠集落が出現しています。それらの環濠の形態や低地という立地条件を踏まえ、防御機能と異なる防水害対策や利・排水機能さらに集落（間）の紐帯機能や視覚的效果を期待する境界説など多様な見解が提示されています。前期の環濠は、半島の防御機能を踏襲したと考えられますが、中期以降になると地理的条件や集落（間）の繋がりとといった社会条件などにより変容していったとする意見が多数です。

4 墓域と階層分化

(1) 首長墓 昭和46年からは、付近の団地建設などに伴い福岡市を中心に広範囲の調査が始まります。西側沖積低



地からは旧河道や水田の付随施設（堰・杭・矢板列など）が検出され、農具などの木製品が出土しました。また、北台地では前期の土坑（108基）とさらに時期が遅れませんが木棺墓・土坑墓・甕棺墓など56基ほどで構成される墓域（左写真：貯蔵穴群と墓群）が確認されました。また、大正5年に確認された中央台地の副葬品を伴う前期後半以降の墳墓群ですが、首長墓と評価されています。さらに、環濠北側から集団墓と離れて子供用甕

棺墓7基が検出され、4基から小壺や碧玉製管玉などの副葬品（左下：甕棺墓）が入っていました。これらを根拠に、稲作を中心とした生産力の高まりを背景とした階層分化があったとする考えが有力となりました。



(2) 階層分化の要因 かつては、水稻稲作を基礎とする社会では、居住地や耕地を拡大するためには集団の統率者の存在は不可欠で他集団との調整には政治力が必要であったとして弥生時代当初からの首長の存在を当然視されていました。しかし、1960年代に人類学者E・Rサーヴィスが社会進化の過程を4つのレベルに再分化し、「バンド」→「部族」→「首長制社会」→「国家」といった概念を定義づけ、「未開の社会組織」1962年）国内の考古学にも導入されました。首長制社会は、部族社会から国家への移行段階の政治組織と定義付けられています。バンドや部族社会は、親族組織や利害関係によって結ばれた地域社会の独自の自治権によって成立した社会政治システムで、首長制社会は、平等関係にあった部族社会を支えた血縁集団の中で上下関係が生まれ、一つ（少数）の集団が首長の地位を独占・継承するもので、成層化した社会といえます。

高倉洋彰氏は、北部九州での首長の出現過程を、墓域の構成と副葬品に着目して①伯玄社タイプ（前期）→②汲田タイプ（中期初頭）→③立岩グループ（中期後半）→④宮の前タイプ（後期後半）と遺跡名を冠して分類しています。（「古墳をとらえてみた弥生時代社会の発展過程」高倉洋彰「考古学研究」1973年）これは、家族墓から特定個人墓に至る階層化の過程を明示したもので、その呼称は地域により異なりますがその視点は多く支持されています。

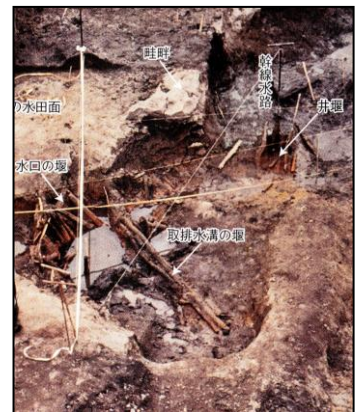
近年、注目されているのが階層化した要因です。かつては開発により農業生産力の上昇（単位集団→親族共同体→地域共同体の成立を背景）を重視し、財の蓄積と不均等が階層化を促進したとする意見が主流でした。最近では、弥生時代の農業生産性がさほど高くなかったとする指摘もあり、長距離交易の調整力や交易によって得た威信財の獲得と分配に着目する考えが有力となっています。

(3) 個人墓出現前夜 板付遺跡の墓域は、前述のとおり、集団墓制（群構成）をとりその中の一部の墓には青銅器が副葬される「汲田タイプ」（個人墓が出現する前段階 中期初頭）に相当します。但し、子供用甕棺墓は集団墓の出現前と位置づける家族墓の「伯玄社タイプ」に類似しています。伯玄社タイプは、土器や石製品などの副葬品が

特徴です。従って、この時期の板付遺跡は、格差のない家族墓段階から農業共同体が形成され非等質な社会に移行する過渡的な段階といえます。階層分化が顕著となるのは、その後の「立岩グループ」（中期後半：中国鏡や鉄器が副葬された特定集団の墓）から「宮の前タイプ」（後期後半：特定個人墓）に至る段階です。北部九州では中期後半以降大量の副葬品を伴う墓が分布していますが、墳丘は大規模化しないのが特徴です。首長制社会の成立は、後期後半の北部九州や吉備・丹後・出雲など大型弥生墳丘墓が出現する一部地域に認めるかそれ以降の古墳期に成立を認めるか意見が分かれています。

5 縄文水田

(1) **前期水田** 昭和 53 年の調査では、西側沖積地の夜臼式土器と板付 I 式土器が出土する地層（上層・下層）から 2 枚の長方形の水田祉が検出され注目を集めました。上層の水田は（幅 18m 以上×長さ 26m 468 m²以上）下層は（幅 11m 以上×長さ 26m 286 m²以上）という大区画水田で、水路と水量を調整する井堰と取排水路が付設されていました。



(2) **初期水田** さらに、その最下層（夜臼式土器単独出土層）からも東西幅 6~10m 南北長 50m 以上で 500 m² 以上の長方形の大区画水田が検出されました。その畦畔は水路（幅 2m 深さ 1m）に沿って幅 1m 高さ 30cm で、水田間の畦畔は幅 50~80cm 高さ 15cm 前後が 2 条報告されています。低位段丘面の傾斜を利用した水田です。また、夜臼式土器とともに木製農具・石包丁・炭化米などが出土しています。注目されたのは、前期の水田祉と同様に縄文晩期（弥生早期）に既に完成された灌漑施設（右上図）があり、水路や小ぶりながら取排水路も検出され、水口や堰が設置され水量調整がなされていたことです。なお、調査の際に水田のプラントオパール分析や花粉分析・種子分析がなされ、畝作に付随する雑草は検出されず水田雑草のみといった報告がなされていました。しかし、近年、レプリカ法による圧痕研究が進み、遺跡出土の板付式土器（前期）から、畝地栽培のアワ果実やダイズ属種子の圧痕が報告されています。（平成 23 年度日本海学研究グループ支援事業報告書）

(3) **小区画水田** 戦後まもなく登呂遺跡の「弥生水田」にはじまり板付遺跡や滋賀県服部遺跡では大区画水田が検出され、稲作の生産性が高く評価されました。しかし、中西秋津遺跡など奈良県内の前期の水田祉を含め近年各地



で報告される弥生期の水田は、扇状地端部などの緩傾斜を利用した「小区画水田」が多く、また登呂遺跡や服部遺跡の（再）発掘調査でも小区画水田であったことがあらためて報告されています。朝鮮半島では、早くから畝作農耕が始まり、大規模な「はたけ状遺構」が晋陽市大坪玉房地区や漁隠地区から検出されています。一方、半島最古の水田は、無文土器時代前期（前 11 世紀頃）の蔚山市無去洞玉峴遺跡（左写真：小区画水田）と論山市麻田里遺跡などが報告されています。いずれの遺跡も、丘陵部の傾斜を利用した 10 m² ほどの小区画水田です。

(4) **鍬床層** 水田の規格は、稲作の生産性に関わる重要な評価の指標ともなります。玄海灘沿岸部に多く検出されている弥生早期の水田祉ですが、菜畑遺跡・曲り田遺跡をはじめ十郎田遺跡・有田七田遺跡・雀居遺跡は小区画水田です。大区画水田ですと、板付遺跡と 4km 離れ水系が異なりますが中位段丘面に水田をもつ野多目遺跡のみです。水田区画の決定の要因は、地形の勾配（例：イネの水深が 5cm とすると 1 区画の標高差は 5cm 以下）とともに技術的要因が想定されます。当時は、作土層の下に水を貯める不透過層（鍬床層：土を固めた緻密な粘土層）が無かったとする発掘報告もあり、また、用水が垂直に浸透していたとする報告もあります。（「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」考古学と自然科学 21 号 1989 年藤原宏志）灌漑効率を重視すると水田の堪水状態を保つためには 20~30 m² ほどの小区画であることが不可欠だったと考えられます

今日では、100 m² 以上の大規模水田が一般化するのには、古墳時代後半に牛耕が現れた以降といわれ、稲作の生産性があがるのは、その頃と考えられています。

ご連絡とお願い

支援隊のガラケーは 2022 年 3 月をもって使えなくなります。今後の連絡メールは無料で使える yahoo メールを使用し、電話は連絡係のスマホとします。以下のご確認をお願いいたします。

1、連絡は会専用メールで行います。

- ・送っていただくメールには、トラブル時の対応のための電話番号を記載下さい。
- ・どうしてもメールが不都合な方につきましては、連絡係の個人携帯に願います。

会専用メールアドレス； kksien_2004@yahoo.co.jp

連絡係万徳の携帯電話；(別途通知済み)

- ・ホームページの [お問い合わせと加入申込] / お問い合わせサイトでの連絡も可能です。

2、メール送受信の注意点

キャリアメール (@ezweb.ne.jp, @docomo.ne.jp, @softbank.ne.jp 等) では、受信者側のセキュリティ設定により会専用メールが受信できないケースが出てきますので、この場合はメールを受信できるように、次のドメインまたはメールアドレスについて指定受信の設定を行ってください。

(ドメイン) @yahoo.co.jp

(メールアドレス) kksien_2004@yahoo.co.jp

尚、設定方法がよくわからない方は、ご家族、知人かお近くのショップにお聞き下さい。

3、情報の案内について

メールでホームページの更新情報・イベント情報をお送りしています。届いていない方で必要な方は、kksien_2004@yahoo.co.jp に連絡ください。念のため電話番号もお知らせください。

4、アドレス・電話番号を変更について

メールアドレス・連絡電話番号を変更される方は kksien_2004@yahoo.co.jp に必ず連絡下さい。

5、ホームページの会員用サイトのパスワードについて

パスワードは、別途通知済み

連絡係 万徳

活動報告

- **学校支援活動** 上半期の学校支援は、コロナ禍のなか、三密やソーシャルディスタンスの確保に配慮し、マスクとフェイスシールドを着用して予定の日程を無事終了しました。10 月より下半期の学校支援が始まります。また、周辺地区の小学校の支援活動も新たに始めます。

(下写真：左は「北小の勾玉づくり」、中央は「平野小の土器づくり」、右は「南小の勾玉づくり」の支援風景)

- **ものづくり活動** 勾玉づくり、土器づくりの粘土切り、火燻し道具の整備など学校支援の教材づくりに限って活動を再開しています。

- 弥生ウォークは、休止中です。



(編集委員)

東 治雄 植田洋高 谷口敬子 福島道昭 藤原隆雄 万徳順一 宮川真由美 井上知章 (文責在編集員)